〔東京家政大学研究紀要〕第55集 (1)，2015，pp.1～10〕

贈与と互酬
―被災地で支援活動をした保育者たちの経験―

岩崎　美智子

（平成 27 年 1 月 7 日査読受理日）

Gifts and Reciprocity:
the Experience of Nursery Teachers with Disaster Area Assistance Projects

IWASAKI, Michiko

（Accepted for publication 7 January 2015）

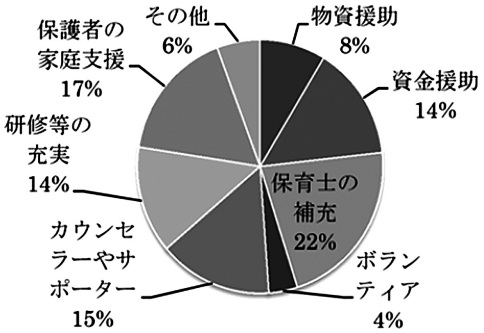
キーワード：被災地支援，ボランティア，専門職，関係，互酬性
Key words：Disaster area assistance, Volunteer, Profession, Relationship, Reciprocity

はじめに―問題の所在

2011 年 3 月 11 日に東北地方を襲った地震と津波の後，被災地には多くのボランティアたちが集まり，支援活動をおこなった．ボランティア活動の内容は多岐にわたるが，物資の仕分け，避難所でのケア，清掃活動に加えて，津波被害による家屋の泥だしや家財の撤去作業，写真の汚れとりといった作業もあった［三谷 2013：77］．その主たる担い手は，一般市民，NPO，そして学生たちであるが，日本栄養士会や日本介護福祉士会等の職能団体もボランティアを派遣した［桜井 2013：11］．

子どもたちが毎日を過ごす保育所にも，生活に必要と思われる衣類や物資が「膨大」と言っていいほど大量に送られ，子どもたちを励ますそうと歌や人形劇を披露するグループや団体が頻繁にやってきた．それらが生活物資の不足を補い，子どもやおとなを励ましたのは事実であるが，子どもたちにとっては，「日常生活」を安心して穏やかに過ごすことがもっとも必要なことであるといえるだろう［岩崎 2013：78］．では，子どもを実際に保育している現場では支援についてどのように考えられていたのだろうか．図 1 に見られるように，全国保育士会が 2011 年 11 月に宮城県の被災保育士たちを対象に調査を行ったところ，「今後，職場（保育所）に必要な支援は何か」という問いに対しては，「保育士の補充」という回答が 22％と最多であった［全国保育士会 2014］．ホームページによれば，全国保育士会は被災地への募金活動をおこなってはいるが，団体として直接保育士の派遣はしていないようである．筆者が把握した限りでは，東京都社会福祉協議会保育士会が 2011 年に岩手県へ継続的に保育士を短期（3 日～ 4 日くらい）で派遣している．その数は，2011 年 7 月～ 10 月の期間に 60 人を超えたという［本郷 2011：42，毎日新聞 2013］．

宮城県の被災保育士への調査結果　　2011 年 11 月



全国保育士会，2014，「全国保育士会の東日本大震災被災地支援」，http:www.z-hoikushikai.com/［2014-8-23］　より複写

図 1　職場（保育所）に必要な支援

前述のように，被災地の子どもの「日常」を取り戻すためにも，現地の保育者たちの負担軽減に資するためにも，実際の保育を知る「専門職」としての保育者がボランティアとして一定期間保育現場で支援活動をおこなうことは意義が大きいといえるだろう．そのため，本稿においては，被災地の保育所に支援に出向いた保育者の語りを取りあげ，彼女たちの支援活動という経験について考察する．

1　ボランティアのとらえ方

1-1 「関係」としてのボランティア

「ボランティア」とは何かという問いに対する古典的な答えとしては，「自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する行為」という定義があり[1)]，「ボランティア 3 原則」がよく引き合いにだされる．ボランティア活動の基本的性

児童学科　福祉社会学研究室

格は，自発性，無償性，公共性の３つであるというわけである[2)]［原田 2000：29-40］．しかし，長い間浸透していたこの考え方は，1970 年代ごろから変化が出はじめ，1990 年代に大きく変貌したといわれる．そのきっかけとなったのは，1995 年の阪神・淡路大震災であり，この年は「ボランティア元年」と呼ばれた[3)]．

この変化と連動して，ボランティアを他者との関係性においてとらえる議論が登場する．たとえば金子郁容は，ボランティアとは「その状況を「他人の問題」として自分から切り離したものとみなさず，自分も困難を抱えるひとりとしてその人に結びついているという，「かかわり方」をし，その状況を改善すべく，働きかけ，「つながり」をつけようと行動する人」と定義づけた［金子 1992：7 および 111］．また，「個人の選択的意思に基づき，他者との連帯をめざす，人々の主体的・創造的・自律的な行為」を「ボランタリズム」とする定義もある［西山 2007：ⅱ］．これらの議論をふまえたうえで，本稿では，無償性や公共性と比べて自発性をその主要な要素と考え，「関係」を重視する．つまり，原田のいうように，「ボランティア」を，「望み」を発端として他人同士が出会うこととし，その関係は，「望み」を声に出す人と，それに応じようとする人との一時的な結びつきであるととらえて，人と人との結びつきや特定の誰かとの具体的な関係に注目して考えるのである（原田 2010：229）．そこで，本稿においては，ボランティアとは，「他者が必要としているであろう状況をとらえ，状況の改善をめざすべく自発的に行動する人，または，そこで行われる一時的な行為であり，特定の誰かと結びつく具体的な関係．そのため，ボランティアは，他者とのつながりや連帯への志向性を含んでいる．」と定義したい．

1-2 「贈与」という視点

前述のように，ボランティアを，人と人との結びつき，特定の誰かとの具体的な関係として考えるが，先行研究からまとめると「関係としてのボランティア」にはいくつかの特徴がみられる[4)]．

①双方の間で人間関係が成立する場合にのみ実現されるもので，日常の外で結びつくという意味で「非日常」の関係といえる．しかし，それは単純な関係でもある．
②他の方法ではできないことを，一時的に実現させている．
③自分が自由になる時間で他者や組織のために活動するため，「やる自由」と「やらない自由」が存在する．そこには，強制はなく「自発性」が根拠となるが，いっぽうでその関係は脆弱で，不安定な関係となる．

これらをふまえたうえで，被災地支援における被災者と災害ボランティアの関係を考察するにあたっては，「贈与」という視点がてがかりになると考えた．『ボランティアという生き方』のなかで，コールズは，「贈与」という言葉を使ってはいないものの，ボランティアを「する側」と「される側」の関係性についてつぎのように述べている．「ボランティアは相手に希望をもたらすが，相手にねたみやひけめを感じさせることもある」［Coles 1993 = 1996：359-362］．また，スレイターは，贈与論をもちいた優れた分析を示し，「見返りを受け取ることなく与える行為は，返済できない借りによって受け手に足枷をはめることになる．とりわけ絶望的に困っている状況では，それは受け手が自己の尊厳を要求する可能性を否定することになる．このことは，無力感や疎外感につながる．そして，最終的に，「純粋な贈り物」は，贈り手と受け手の間のいかなる関係をも否定することになる．なぜなら互酬とは，関係性そのものに属するからだ．」と論じる［Slater 2013：80-81］．さらに，仁平は，明治期後半から 2000 年代にかけてのボランティアに関する言説を膨大な資料から読み取って，「他者のため」と外部から解釈される行為の表象を，〈贈与〉と呼び，「「ボランティア」という言葉には，このような〈贈与〉が織り込まれている．」と述べる．また，〈贈与〉とは，外部観察によって，絶えず反対贈与を「発見・暴露」される位置にあって，〈贈与〉は，相手や社会にとってマイナスの帰結を生み出す（反贈与的なもの），つまり「贈与のパラドックス」であると規定した［仁平，2011，10］．以上のような贈与論を参考にして，保育者の経験を読み解いていくことにする．

2　インタビュー調査概要

2-1　調査方法

筆者は，地震と津波の被害に遭った東北地方の保育園で支援活動をおこなった６人の保育者に，ひとりあたり 90 分程度の個別インタビュー調査を実施した．質問内容としては，支援活動の時期，支援先（園とクラス），支援活動の内容，支援活動において感じたこと・思ったこと等とし，あまり質問内容を限定しないで自由に語ってもらった．

Ａ・Ｃ・Ｄの３人には，１回目のインタビューを 2013 年３月～７月に，２回目のインタビューを 2014 年７月～８月におこなった．Ｂ・Ｅ・Ｆの３人には，2013 年７月に１回だけインタビューを実施した．

2-2　調査対象

インタビュー対象者は，全員女性で，20 代後半から 40 代前半までの現役または元保育者である．保育士または幼稚園教諭の経験が，少ない人でも５年以上あり，かつＡを除いた５人は，途上国で２～４年の間保育・幼児教育の支援活動をした経験をもつ．つまり，Ｂ以下５人は，国際ボランティアとして，文化や習慣が異なる国でひとり現地の人びとの職場に入って支援活動をした人たちであるため，行動力があり，異なる環境に対する適応能力も高いと

思われる人びとである．このうちＥさんとＦさんの２人は，被災地での活動期間が２週間～３週間という比較的短期間だったため，今回の分析対象からは除き[5]，４か月～１年間という長期にわたって保育園で支援活動をした４人の語りをとりあげる．被災地の子どもと保育者のことを考えるならば，ボランティアが短期間で入れ替わるよりは一定期間継続される支援活動のほうが望ましいと判断し，長期ボランティアの経験を考察の対象とした．調査対象者のプロフィールは，以下のとおりである．（表１）

表１　調査対象者のプロフィール

名前	居住地	年齢	職業	活動期間	派遣の形態
A	関東	20 代	保育士	1 年	勤務園から出向
B	九州	20 代	アルバイト	1 年 5 か月*	団体から派遣
C	東北	20 代	団体職員	5 か月	団体から派遣
D	関東	40 代	保育士	4 か月	団体から派遣
E	関東	30 代	アルバイト	3 週間	団体から派遣
F	関東	30 代	幼稚園教諭	2 週間	団体から派遣

＊前半の５か月間は，子育て支援センター

3　保育ボランティア（支援者）のタイプ

3-1　保育ボランティアの４類型

保育ボランティアを，活動期間の長短と自発性・受動性を軸に４つのタイプに分類した．（図２）

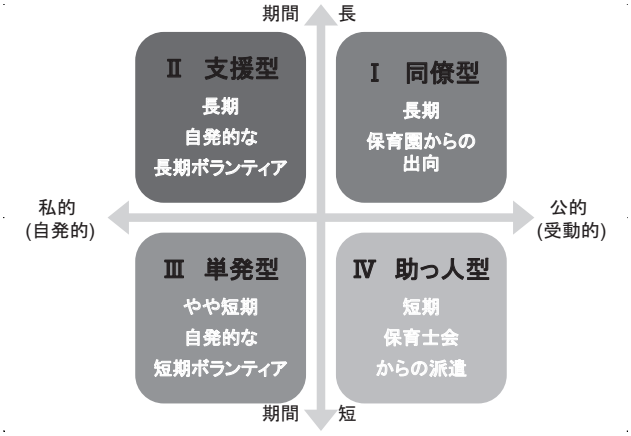


図２　保育ボランティアの４類型

Ⅰは，「同僚型」で，長期である．派遣形態は，勤務先の保育園からの出向であり，代表的な人はＡさんである．Ａさんは，園長から「行きなさい」と言われ，１年間東北地方の園に勤務した．

Ⅱは，「支援型」で，長期である．団体の募集に応じたもので，自発的に活動に参加した．代表的な人は，Ｃさんと Ｄさんで，Ｃさんは４か月，Ｄさんは５か月間保育園で支援活動をおこなった．

Ⅲは，「単発型」で，やや短期（２～３週間）である．自分の勤務先の園長と被災地の園長とが知り合いであるといった保育園同士の関わりから活動に出向いたり，みずからボランティアツアーに参加したような場合である．例として，Ｅさんと Ｆさんがあげられる．

Ⅳは，「助っ人型」で，１週間以内の短期の活動をさす．職能団体からの呼びかけに応じたもので，東社協保育士会から派遣された保育ボランティアなどがこれにあたる．

3-2　「良好」グループと「困難」グループ

ここでの分析対象は，４か月～１年間という長い間保育園で支援活動をおこなったⅠ型とⅡ型（Ａ～Ｄの４人）であるが，「Ⅰ同僚型」（Ａ・Ｂ）と「Ⅱ支援型」（Ｃ・Ｄ）の２組はインタビューの初めから対照的な反応を示した．端的に言えば，「Ⅰ同僚型」（Ａ・Ｂ）は，困難はあったものの比較的楽しく（という言い方は，適切ではないかもしれないが）支援活動を終えたといった達成感がみとめられたのに対し，「Ⅱ支援型」（Ｃ・Ｄ）は，当時の話をする表情が苦渋に満ちており，言葉のひとつひとつから疲労困憊した数か月が伝わってきたのである．本稿においては，「Ⅰ同僚型」（Ａ・Ｂ）を「良好」グループ，「Ⅱ支援型」（Ｃ・Ｄ）を「困難」グループと規定し，彼女たちの語りに検討を加えていく．この場合の「良好」とは，自分（支援者）自身が納得のいく活動ができた，あるいは被災地の保育園の先生方との関係において問題がなかった，という意味である．いっぽうの「困難」は，支援活動全体を通じて必ずしも納得のいく支援ができなかったと本人が感じているケースであり，被災者との関わりにおいても関係構築が充分ではなかったと話したものである．

つまり，本稿の問題意識は以下に基づく．「2-2　調査対象」のところで述べたように，本研究の調査対象者の多くは，途上国でのボランティア経験をもっている．国際ボランティアの経験者は，おそらく他者との連帯への志向性が強く，かつ異文化との葛藤といった困難を乗り越えた人びとである．知らない土地での生活や出来事に対しても比較的適応能力が高いものと想像される．そのような人びとが，なぜ被災地支援においては困難に直面したのか．その点を検討して，困難を生じさせた要因を明らかにすることを目標とした．

ちなみに，Ｂさんの語りは，保育園での支援活動についての分量が少ないため，本稿では「良好」グループの語りの大半をＡさんのものが占めている．また，Ａ，Ｃ，Ｄの３人は，配属されたクラスは異なるものの，同じ保育園で活動をした．

4　何が明暗を分けたのか―「良好」と「困難」の相違

「良好」グループと「困難」グループは，どうしてこのような違いが出たのだろうか．以下，ボランティアとして

活動した人を「支援者」，東北地方の保育所保育士を「被災者」として，その関係性を検討する．

4-1　立場（支援者の自己認識）のズレ

被災者たちは支援者をどのような立場ととらえ，支援者たちは自らをどのように規定していたのか．語りを紹介しよう．（図3）

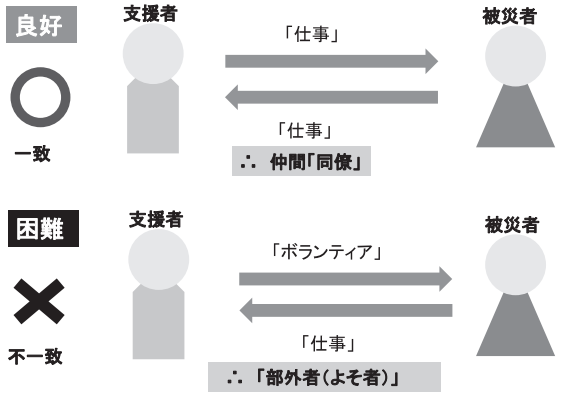


図3　立場（支援者についての）認識のズレ

良好

〔A さん〕

（わたしは）ボランティアではないですね．派遣されて，仕事として行きました．はい．仕事として，人が足りない分を埋めるっていう意味の…．ボランティアだったら，もたないと思います．

〔B さん〕

ボランティアの定義というものにもよると思うんですけど．わたしは仕事だと思って行ってました．やっぱり，期間も長かったので．「ボランティアで行くなんてすごいね」とは言われてましたけど…．いや，でもお給料ももらってるし．

まず，第一に，支援者の自己認識と，被災者の彼女らに対する立場の認識の相違が挙げられる．被災者は，当初「自分たちと一緒に仕事をしてくれる人が来た」と認識あるいは期待している．「良好」グループのＡやＢは「「仕事」として行った」「仕事だと思って行った」と話しているので，両者の認識は一致する．そのため，被災者は支援者に対して「同僚」あるいは「仲間」という意識をもつことになる．

困難

〔C さん〕

その派遣スタイルっていうのもあるのかなあ…．やっぱり，Ａさんは本当に保育士，何て言うんでしょう，一職員として働くっていう意識があって行っていて．わたしたちは先生たちのサポートだと思って行っていて，そこの違いももしかしたら（あるかもしれない）．わたしたちはサポートだと思って行ってたのに，ふたを開けてみたら担任で．で，なんかどんどん毎日仕事が増えていく．思ってたところと違うっていうのもあったのかなあ．

あー．でも，ほんとにマンパワーとして，もう半内部的なかかわり方をしてしまったので…．でもいろいろアイディアを出すとか，そういったことはまったくなかったです．ほんとに言われるとおりやるっていう…．

たとえば，ほんとに自分がそこに働いて，もう，職員として入れますってなったら，それ（アイディア）は出せると思うんですよ．でも，それはもう，わたしはここに勤めたからっていう意識があるからこそ言えるわけで，わたしは「一ボランティア」だって，３月になればいなくなる立場というのを自分でも常に認識はしてたので，ま，ここで，あえて自分の存在を押し出すよりは，先生たちがやりたいことをサポートする側なのかなって思ったので…．

その保育園って，結構お楽しみ会とかしても，すごい盛大にやるんですよ．それでなんか労働時間が長くなったりしてたんですけど．でも，それをもうちょっと簡素化するとか，こう，うまく効率よく回す方法って，たぶんあったと思うんですけど．そういうのも，「もうちょっとこうすれば楽なのにな」って思うけど，ま，そこはあえて言わないとか…．

やっぱり，その先生たちのこれまで築いてきたこととか，そういうのがあるんだったら，そこをぽっと来た，しかも３月までしかいない人が言うのはちょっとおかしい…．おかしいというか，うん，違うかなあと思って言わなかったですね．

〔D さん〕

団体は支援者というかたちで募集してるんで，復興支援というかたちで．だから支援者として向かったんですけども，現地では支援者よりも保育者が欲しいんですよね，普通の．支援者というよりも，何て言うんだろうな，ほんとに手として欲しいわけで．そこらへんで，なんかやっぱり，ずれが１つあったなというのは感じていて，打ち合わせがあれば，そこらへんのずれなくできたのかなという気もしたんですけど．

わたしの中で言えば，支援者っていうか，やっていかなくちゃいけないのは現地の先生たちだと思うので，わたしたちは一時的な人間であって，常に先生たちが主体的になってできる，わたしらが主体的にやっちゃいけないんじゃないかという思いが，ちょっとあっ

て．まあ，補佐的ではあるんですけど，補佐だけど，かなりやらなくちゃいけない部分もたくさんあるから．

―そうすると，要するに派遣される前のイメージしていたものと，実際に向こうで求められていたものが違ったということですか．

かなり違うということはありましたね．責任が重かった（笑）．担任をやるとは思ってなかった．思ってなかったですね．あくまでも補佐的な，何だろうな．フォローとしての立場．もう少し，雑用，事務ですね．けど，実際には担任になった．クラス担任ですね．（クラスの子ども全員を）１人で見なくちゃいけないときもあったりして．

わたしたちはボランティアだから，もう本当に数カ月の短い滞在期間しかそこにいない人間だっていうような意識が強く働いていて…．やっぱり，先生たちの仕事を奪ってはいけないとか，わたしたちはあくまでも影で支える立場っていうような意識が強く働き過ぎてしまったところはあるかもしれないですね．本当に，先生たちがそこを求めていれば，もちろんそういう動きでいいんでしょうけども，その当時のやっぱり先生たちのニーズというのは，もしかしたらそこじゃなかったのかもしれないっていうのが１つありますね．そこがやっぱり，なかなか読み取れなかった．

対するＣとＤは，自分は「ボランティアである」「サポートだと思って」と話しているので，被災地の保育者たちとＣ・Ｄの２人とは認識が一致せず，おのずと「仲間」とは感じられない「部外者（よそ者）」扱いされることになる．

4-2　仕事内容のズレ

立場の認識のズレは，実際の仕事の中身にも影響する．語りを見てみよう．（図４）

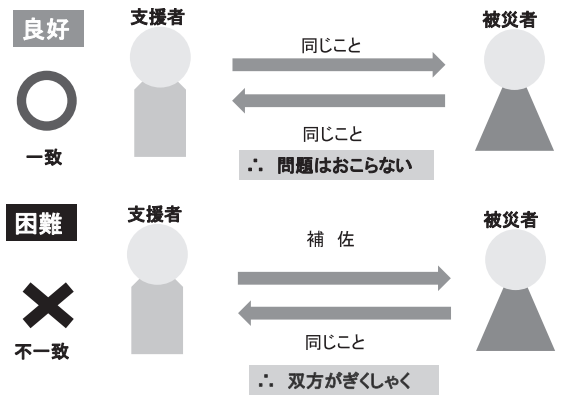


図４　仕事内容のズレ

良好

〔A さん〕

最初は人手になるっていう思いが強かったし，自分の色というか，そういうのを出さないようにしてたんですけど，もうだんだんそれがよくないと思えてきて，わたしは内部の人間になったから，少しずつ自分の保育っていうのをするようには心がけてました．

―それは，いつごろから変わりました？

いつごろなんだろう．でも，じわじわ出してたのは６月ぐらいから．なんかいやだと思っていたことをできないので．性格的に．

たとえば，子どもが泣いてたらすぐおぶっちゃうとか．なんだろ，子どもが泣いてたら，泣きやむために子どもが好きな遊びに誘うだとか，そうやって丁寧に関われば済むものを，すぐおぶっちゃったりするんですよ．要するに，人手が足りなくて，それ以外にやることがあるから，っていうのもあるかもしれないんですけど，そういうやり方じゃなくて，もっと関わってるんだよっていうのを示す方法のほうが，わたしはしっくりくるので，そういうところはありました．

だんだんその若い職員たちとも仲よくなって，なんだろ，愚痴を言ってきてくれるとか…．

その最初からある職員の方はすごくよくしてくださって，いろいろ「あそこがだめなんだ，ここがだめなんだ」っていうのを言ってたんですね．だから，二人ではよく話してたんですけど，ほかの同世代の職員ともだんだん話せるようになってきて…．初めはやっぱり，なんか警戒っていうか，なんかまあ心を開ききれてないというか…．あったのかもしれないですね．わたしも「あそこがいやです」っていうのも言わなかったし，遠慮はお互いしてたんでしょうね．

お遊戯会（12 月）の反省会で…．「なんかある？」って言われた時に，「わたしはもともとそういう保育をしてこなかったっていうのもあるんですけど，制作をしている段階で，自分は子どもを見世物にしようとしているんじゃないかっていうのがすごい不安だった」っていうことを言いました．そしたら，園長先生は，ちょっとご立腹な感じでした．

でも，わたしは怖いもの知らずでいろいろ言えるし，先生たちの思いも代弁したいというのもあって，お遊戯会の時に言ったんですけど…．先生たちに意見しやすい職場になってほしいと思ってたから，わたしが言ったことで言いやすくなってくれたらって，思うところもあるし…．

Ａは，「出向」つまり通常の仕事の延長線上で被災地の保育園にやってきた．被災地の保育者たちとしては，「仕事」であるから，Ａにはクラス担任もやってもらい，自分たちと同じ仕事を分担してもらった．Ａ自身もまた，同じ仕事を同じようにするのが当然だと思い，「内部の人間だから，自分の保育をする」し，園長に対しても意見を言うことができている．

困難

〔Ｄさん〕

―（被災地の）先生たちは，Ｄさんたちのことをボランティアというふうに見ていたと思います？

見ていなかったですね．そこでまずギャップがあったんです，わたしたちのなかでは．先生たちは，わたしたちが仕事で来ているという意識だったと思います．そこで大きなギャップがあることに，わたしたちは気づいたんですね．

―いつごろ気づきました？

結構すぐに．だけど，その調整がなかなかできなかった．向こうが求めてくる量が非常にエスカレートしてくるので．それをわたしたちは感じつつ，負担に思いつつ，そこまでやる必要があるのかっていうことに悩みつつ，でもやってたんですけど．残業もやったし，うちに帰ってきていろんな装飾づくりをやったりとかっていうのも頼まれたので，そういうことも，もちろんやってはいたんですけども．そこのギャップに，かなり戸惑いを感じて．本来だったら，そこの時点で，調整員っていうその方を通じて３者で話し合いがもてれば良かったんだろうなと思うんです．ただ，その話し合いも，活動の当初にまず１回もたれるべきであって．まずそれがなかった．

（活動期間が）短すぎるからこそ，入りこんじゃいけないっていうのも感じたところですね．長ければ，もう少し入る必要があったのかもしれないですけど．自分たちは，いなくなる人間なので．

でもね，保護者対応なんかも求められたりして…．保護者対応なんて，やっぱりいなくなる人間がするもんじゃないと思うんですね．大事な伝言だったり，病気のことだったり，短期のわたしたちがそこまでしていいのかどうかっていうのが…．

（被災者の先生方は）「やってもらう」っていう感じですね．認識のずれですね．

ああ，いまひとつ思い出しました．気になっていたのが，「派遣さん」っていう呼び方をされてたんですね，わたしたちのことを．「派遣さん」です，最初っから．「派遣さんたちにお願いしましょう」とかね，たとえばそういう意識が…．支援者でもなく，ボランティアでもなく，「派遣保育士」なんですよね．

「困難」グループのＤは，「自分はいずれいなくなる人間なので，補佐的な仕事だけをする」つもりでやっている．「あまり入りこんではいけない」と控えめである（しかし，実際には頼まれた仕事を断ることができず，言われるままに仕事をしているのだが）．被災地の保育者たちは，「（Ｄにも同じように）やってもらう」つもりで「求める仕事量が次第にエスカレート」していった．これは，支援者の側のＤも「違うんじゃないか」と思うようになり，次第に，双方がぎくしゃくした関係になっていった．

4-3　関係（互酬と贈与）のズレ

支援活動によって被災者にもたらされるものは何か．そこには，どのような関係性が生じるのだろうか．（図５）

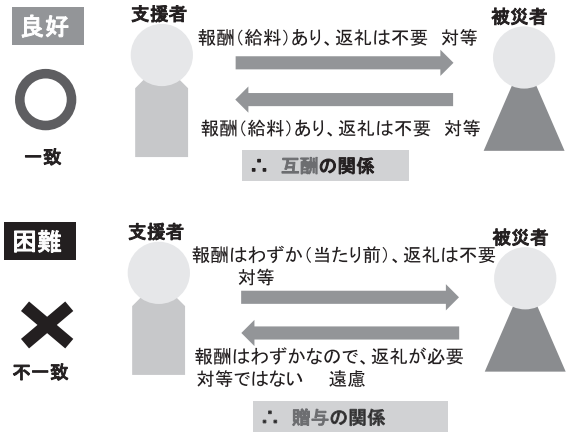


図５　関係（互酬と贈与）のズレ

良好

〔Ａさん〕

わたしは，すごく人に恵まれてたんだと思います．保育園の先生たちも，最初は敬遠するというか，そういう感じはあったんですけど，よく話してくれたり…．

―いつごろから，みんなとうちとけた？

うーん．どれぐらいなんだろうな…．うわべののおつき合いは上手にしてくれるから，仲よくなってる感じは出してくれてたんですけど．でも，実際こっちが

心を開き始めるのってまだまだだったので，どれぐらいなんだろう？8月とかですかね．そうですね．職員の方もすごくよくしてくれたし．

―Aさんは出向で仕事として来たわけだから，先生方がボランティアのような遠慮っていうのは，そんなにはなかった？

そうですね．もう担任としてしっかり入ってましたから．

このような支援者と被災者の関係を贈与論的に考えてみると，「良好」グループの支援者Aは，「出向」という仕事で来ているので，所属先の保育園から給与が支給され雇用も保障されている．そのため，被災者は支援者に遠慮する必要がない．働いてもらうのは当然であり，自分たちが受ける支援は給与という報酬によってまかなわれるので，対等な関係，つまり互酬関係にあり，臆することはない．そのため，被災者―支援者の関係は安定し，多少の問題は生じてもそれが決定的な亀裂にまでは至らない．

困難

〔Cさん〕

先生たちのとまどいが，先生たちがまったく，何て言うんでしょう．うーん，言葉が悪いかもしれないですけど，冷たい．わたしに対して…．こんな，自己中心的ですみません．

すごいこう，何て言うんでしょう，そうなんですよ．お昼食べてたりとかもすると．まあ，幼稚園や保育園って基本明るい現場じゃないですか．先生たちのコミュニケーションがすごいわたしはいいと思うんですよね，幼稚園や保育園って．「あ，何をやってるの？手伝うよ」って言って，一緒に紙を切ったりとか．そういうイメージでいたので，（被災地の園では）それがなかった．

会話というのがあまりなくて，食事をするときも，結局，赤ちゃんたちが寝ている午睡中にご飯を食べるので，うるさくおしゃべりできるわけではないんですけど…．でも，それでもやっぱり会話はあるだろうなって思ったんですけど，まったくなくて，無言で食べる．みんな…．赤ちゃんたちが寝てるときに，乳児クラス担当が私たち2人，あと別の乳児クラスの先生も2人で，もうひとつの乳児クラスの先生が1人だったから，5人で食べるんだけど，そのとき会話がない．そうなんですよ，みんながなくて…．

地元の先生同士話すときも，なんかぎくしゃくしてるなっていう感覚があって．そうなんですよ．もともとやっぱり，人間関係がぎくしゃくしていたというのもあるかもしれないんですけど，あるクラスの40代の先生が家を被災されていて，だんなさんは仕事に就かれてたけど．そうですね．家が被災していたというのもあって，なんかちょっと，その先生が不安定気味だったんですね．その先生を筆頭にみんなが暗くなっているという…．

―ああ，もしかしたら，そういう被災した人に対して，みんなが気を遣っているということなのかな．

うん，そうかもしれないですね．その先生にみんなが合わせている，無理に．わたし，なんかぎくしゃくしてるなっていう感覚を受けて．

なんかその，世間話とかもあるんですけど，でもその世間話が，世間話の中でも気を遣われているっていうのがすごい伝わる．その40代の先生に対して気を遣うんです．わたしに対しては一切気は遣われてないんです．逆にわたしはもう，部外者だという目でしか見られてないんですよ．その11月のときは．

わたしは，もっとなじめると思ってたんですね，自分で．異文化の中東で大丈夫だったし，いけるだろうと思ってたんですけど，一切そんなことがなくて…．「この人はもう部外者だよね」みたいな，何て言うんでしょう，冷たい視線というか…．「あれ，わたしってこんななじめない人だったかな」というのもあって，その1か月はほんと悩みました．つらかったですね．

対等な関係であったAに対して，CとDはどうだったのだろうか．CとDは，被災地の状況を知って，自分ができることはないかとやむにやまれぬ思いで東北の地を踏んだ．彼女たちの自己認識は，「ボランティア」である．ボランティアは，「支援者」であるから，あくまでもその存在は黒衣であるべきである．自分たちは，数か月後にはこの地を去っていくのだから，ここでは当事者が支援を必要とする部分だけを補填し，助言や助力ができればよい．そう考えていた．しかし，被災者たちにとってみれば，彼女らは「仕事」をしにきたのではないのか，どうしてもっと働かないのか，と当初は思ったことだろう．しかし，次第に，この人たちは団体から派遣された「ボランティア」なのだという認識が生まれてくる．CやDは，「有償ボランティア」という立場であり，報酬はわずかである．このことを，被災者からみると，彼女らボランティアは園からの出向ではないので報酬が保障されているわけではない．本来ならば返礼（お返し）をする必要があるが，自分たち

は返礼ができない状況にあるため，支援者に助けてもらうだけだ，というふうに考える．贈与される立場には気遣いや重荷が生じ，支援者と対等な立場ではなくなってしまう．そうなると，被災者は，支援者と「同僚」や「仲間」にはなれない．一定の距離を置くことになる．互酬性がみとめられれば支援を受け取るのに，なぜ贈与であると支援を受け取れないのか．その理由は，被災者は，「世話を受ける代償として自立と苦情の権利は放棄」しなければならないからである［Raphael（1986）＝1989：346］．贈与は，ひととしての尊厳に揺さぶりをかけるものなのだ[6)]．

4-4　その他の要因

被災者と支援者の関係性が良好グループと困難グループとに分かれたのは，これまで述べた理由だけで形成されたわけではなく，他の要因も作用していると思われる．

まず，支援される側（被災者）の要因を考えるならば，地域性の問題，つまり東北地方に住む人びとの人間関係の濃密さが挙げられる．彼女らはふだんよく知る人たちと深いつきあいをしているので，見知らぬ人たちが支援者として突然遠方からやって来たものの，職場でともに仕事をすることにとまどいや抵抗を覚えたとしても不思議ではない．また，家族や友人・同僚といったかけがえのない人を喪ったのであれば，その悲しみや苦しみのさなかで，ボランティアという他者に対する配慮まで望むのは酷というものだろう．

支援する側について考えると，第一に，活動の時期の問題がある．被災からまもないころかある程度時間が経過してからかという時期の相違は，被災地の住まいや道路といった環境をはじめとして，物理的にも精神的にも大きな違いがある．地震から半年後の被災地では毎日のように余震が起こったため，支援者たちは，そのたびに「窓を開けて，逃げる準備をした」という．二つ目は，支援者のパーソナリティや体験の違いもあるだろう．共感能力が高い支援者は被災者の悲しみや苦しみを受けとめようとして，その結果支援者自身も「被災者」になる[7)]．また，海外ボランティアの経験が支援のとらえ方や支援の姿勢に影響を与え，被災者と支援者との間に溝をつくった可能性もある．そして，三点目として，派遣元（団体）も大きなカギを握っている．派遣元と派遣先の保育園との関係が良好だったか，活動中の連絡がとれるかということや，支援者に対する活動中のサポート体制の有無が支援活動に影響を与える．

おわりに

Ｃさんや Ｄさんといった自発的にボランティアとして活動しようとした人たちが，どうして支援活動に困難をきたしたのか，人との連帯を志向する人たちがなぜ孤立したのだろうか，といったことへの関心が本研究の発端であった．

困難の背景には，支援者の「ボランティア」という自己認識に対して，被災者が期待する「仕事」としての活動というズレがあった．そして，その認識の相違が，両者の考える仕事内容の齟齬を生み，支援をする側と受ける側のズレを生んだ．援助には，そもそもそれ自体が内包する援助者と被援助者との非対称性が存在するが，被災者は他者が想像する以上に，おのれに向けられた「贈与」に敏感になる．なぜなら「贈与」は，返礼ができない被災者にとっては，自己の尊厳を大きく傷つける刃になるからである．被災者が自己の誇りや尊厳を傷つけることなく受けられる，また支援者と協働できるような一定期間のボランティア活動がなされるためには，「贈与」ではない支援のかたちを考える必要があるだろう．また，職業活動（専門職ボランティア）としての位置づけと，このような関係性の認識をふまえた事前研修や，派遣先への説明，定期的な支援者支援を含む支援体制の確立が必要である[8)]．

今回の考察のもととなった調査は，支援する立場の語りだけで，支援される側の聞き取りはおこなっていない．その意味で，本研究は，一面的な考察であるという限界をもつことを確認し，今後の課題とする．

注

1）中央社会福祉審議会地域福祉専門分科会「ボランティア活動の中長期的な振興方策について（意見具申）」（1993 年 7 月）による．

2）「創造性（開拓性）（先駆性）」を加えて「4 原則」という場合もある［山崎・岸川 2011：21-22］．

3）［西山 2007 6-8］［菅 2014：90-95］

4）以下の文献を中心に要約した［原田 2000：79-121］［原田 2001：26-30］．

5）災害ボランティアの活動期間が 1 日か 2 日という場合も少なくないなかで，2 週間～ 3 週間が「短期間」であるとはいえない．ここでは，他の 4 人と比較しての「短期間」という意味である．

6）スレイターは，被災者が支援を受けるためには，「互酬か不名誉か，選択肢はこの二つしかない」という［Slater 2013：81］．

7）被害者や患者に共感するために援助者に生じる「共感疲労」という心理的疲労や，「隠れた被災者」についてのラファエルの議論を参照のこと［武井 2001：124-125］［Raphael（1986）＝1989：340-341］．

8）職能団体としての医療ソーシャルワーカーたちの実践は，他の専門職ボランティアの参考になる［山田 2013：86-88］．災害ボランティアの先駆者である村井は，「専門家がもっとボランタリーな世界に入ってく

ることがポイント」であると指摘しているが［村井 2013：34-36］，一般的なボランティアとの連携・協働など，専門職ボランティアに関する議論がもっとなされる必要がある．

謝辞

長時間，かつ，話しづらい内容を含むインタビューにご協力くださった保育者の皆様に，心より感謝申しあげます．

付記

本稿は，「ボランティアと仕事のあいだ―被災地で支援活動をした保育者たちの経験―」と題して，日本オーラル・ヒストリー学会第12回大会（2014年9月6日）において口頭発表した原稿に加筆修正したものである．

文献

Coles, R. “The Call of Service: A Witness to Idealism”（1993）= 1996,『ボランティアという生き方』，池田比佐子訳，朝日新聞社

原田隆司，2000,『ボランティアという人間関係』，世界思想社

――――，2001,「意味から人間関係へ―立体的なボランティア理解に向けて―」『ボランティア学研究』第2号，国際ボランティア学会

――――，2005,「第14章ボランティアというかかわり」井上俊・船津衛編『自己と他者の社会学』有斐閣

――――，2010,『ポスト・ボランティア論―日常のはざまの人間関係』ミネルヴァ書房

本郷千恵子，2011,「保育士の湧き上がるエネルギーをこの地に！―東社協保育士会による岩手県内の保育園支援活動」『子育て支援と心理臨床』vol.4 福村出版

岩崎美智子，2013,「支援者であり，被災者でもあった―津波に遭った保育士とボランティア保育士の経験―」『日本オーラル・ヒストリー研究』第9号，日本オーラル・ヒストリー学会

金子郁容，1992,『ボランティア―もうひとつの情報社会』，岩波書店

『毎日新聞』「再建遅れる保育施設」2013年3月18日付朝刊

Mauss, M. “Essai sur le don: Forme et raison de l’échange dans les sociétés archaïques”（1925）= 2009,『贈与論』吉田禎吾・江川純一訳，筑摩書房

三谷はるよ，2013,「第4章　ボランティア活動者の動向―阪神・淡路大震災と東日本大震災の比較から」桜井政成編著『東日本大震災とNPO・ボランティア―市民の力はいかにして立ち現われたか―』ミネルヴァ書房

村井雅清，2013,「災害ボランティア活動から見えること―ボランティアが社会を変える」『福祉社会学研究10』福祉社会学会

仁平典宏，2011,『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版会

西山志保，2007,『［改訂版］ボランティア活動の論理―ボランタリズムとサブシステンス―』東信堂

Raphael, B. “When Disaster Strikes: How Individuals and Communities Cope with Catastrophe”（1986）= 1989，石丸正訳『災害の襲うとき―カタストロフィの精神医学』みすず書房

桜井政成，2013,「東日本大震災とNPO―救援期の動向と議論」桜井政成編著『東日本大震災とNPO・ボランティア―市民の力はいかにして立ち現われたか―』ミネルヴァ書房

Slater, D.H.，2013,「ボランティア支援における倫理―贈り物と返礼の組み合わせ」森本麻衣子訳，トム・ギル他編『東日本大震災の人類学―津波，原発事故と被災者たちの「その後」』人文書院

菅磨志保，2014,「災害ボランティア―助け合いの新たな仕組みの可能性と課題」荻野昌弘・蘭信三編著『3・11以前の社会学―阪神・淡路大震災から東日本大震災へ』生活書院

武井麻子，2001,『感情と看護―人とのかかわりを職業とすることの意味』医学書院

山田美代子，2013,「被災地の医療ソーシャルワーク実践体制のあり方」『一般社団法人日本社会福祉学会2012年度関東部会研究集会抄録集』一般社団法人日本社会福祉学会関東地域部会

山崎美貴子・岸川洋治，2011,「山崎美貴子が語るボランティア再考―市民社会の形成にボランティアが果たす役割―」『社会福祉研究』第112号，財団法人鉄道弘済会社会福祉部

全国保育士会，2014，全国保育士会の東日本大震災被災地支援，http:www.z-hoikushikai.com/［2014-8-23］

全国社会福祉協議会，2014，被災地支援・災害ボランティア情報，http://www.saigaivc.com/［2014-8-23］

Abstract

Through narratives provided by nursery teachers, this research observes the relationship between disaster victims and nursery teachers providing disaster assistance at disaster area day care centers. Those nursery teachers who completed disaster assistance projects as part of their work noted that they were successful, as opposed to nursery teachers who categorized themselves as volunteers: in contrast, the latter individuals experienced problems during the assistance period. Where a sense of reciprocity characterized assistance projects, the victims naturally accepted assistance, but rejected it where they felt it was a “gift.” When professionals work as volunteers for long periods in disaster areas, we need to create a feeling of reciprocity so that aid can be accepted by disaster victims naturally. Further, a system should be established that provides support for disaster assistance volunteers throughout the period during which they provide assistance.